

高校の教科学習におけるキャリア教育充実の手立てについて —進路多様校における生物の授業実践からの検討—

For the purpose of enhancing career education enrichment in high school learning:
An examination via practical implementation of biology lessons at a diverse career path high school.

小田 雄 仁* 東海林 麗 香**
ODA Takehito SHOJI Reika

要約：進路多様校は進学校と比べ、生徒の問題行動が多いこと、就職してもすぐに離職してしまう生徒が一定数いることが課題となっている。このような課題に対する指導の1つとしてキャリア教育がある。本稿ではキャリア教育を、教科教育にも盛り込むことについて検討をした。授業にキャリア教育を盛り込むことに関しては、文部科学省のホームページでも授業案が示されており、積極的な取り組みが推奨されており、例えば理科では「科学的な見方や考え方の習得」が中心とされている。それらのキャリア教育ももちろん大切であるが、それにとどまることなく、例えばDNAの学習に関連づけて差別が許されない理由を、動物の行動の学習に関連づけて暴力（体罰）が間違っている理由を盛り込むことで、社会性を身につける機会となるような生物の授業を実践した。

学習指導要領に沿った授業をしながらも、その学習内容にかかわる形で、どのような社会人となって欲しいのかという願いも込めて授業を展開し、その成果と課題を、①毎時に書かせている「授業感想」の記述、②録音データ、③フィールドメモ、から検討した。ねらいが十分達成されたとはいえないので、課題の原因分析も行った。

キーワード：高等学校、生物、キャリア教育、進路多様校

I 問題

授業のなかで発展的な内容を扱ったり、雑談をしたり等、教科の内容にプラスαの要素を加えることがある。本稿では高校の授業のなかで、学習内容に関連したキャリア教育を盛り込むことで、生徒の「基礎的・汎用的能力」を高められないかを検討する。筆者は現役の高校教師であるが、学校現場にいると生徒の言動にキャリア教育の必要性を痛感させられることがある。例えば、体調が悪いと倒れた生徒を担架で保健室へ運んでいたときに、野次馬で集まった生徒から「あ、こっちも倒れた」「先生、こっちにも担架を」とふざけて発言する生徒や、それを聞いて笑っている集団がいたことがあった。倒れた生徒、その友人らの気持ちを慮れない、そのようなモラルの欠如した言動があるたびに、ホームルーム等でなぜそれがいけないのか、といった話をするようにしているが、本当に伝わってほしい生徒に対して、どこまで伝わるかは疑問である。特に進路多様校では、社会性を身につけるよう指導することが教育の目的の1つであり、その社会性を身につけるための教育として、キャリア教育がある。

キャリア教育が必要となった背景として「勤労観、職業観の未熟さと確立の遅れ」「社会人、職業

*山梨県立塩山高等学校 **山梨大学大学院 教育学研究科 教育実践創成講座

人としての基礎的資質・能力の発達遅れ」「社会の一員としての経験不足と社会人としての意識の未発達傾向」があげられ（文部科学省，2011a），それは看過できない課題である。キャリア教育は、総合的な学習の時間や学校行事でのみ育成されるべきものではなく、すべての教科において扱われるべき内容と、「高等学校キャリア教育の手引き」では各教科内でのキャリア教育の実践例が示されており（文部科学省，2011b），理科では「学習で養う科学的な見方や考え方が様々な職業にも生かされていることに触れ」と、簡易な授業計画も示されている。ただ、進路多様校の教育を考えると、科学的な見方や考え方と同じように「人間関係形成・社会形成能力」や「自己理解・自己管理能力」のような社会人として求められる資質向上の必要性も感じる。

本稿では進路多様校という語句を進学校の対語として用いるが、それは就職する生徒の割合が高い学校というだけでなく、上記のように社会性が未熟と考えられる場面に出会う割合が高くなる学校ということも意味している。社会に出る前の最後の学校教育として、社会性を身につけることは、就職先でのトラブル回避にもつながる。国立教育政策研究所生徒指導センター（2010）は、高校生就職後の離職率や進学者の中途退学者の多さから「高校卒業直後の就職先・進学先の決定のみに焦点を当てる「出口指導」に終始することなく、働くこと・学ぶことの意義とその現実の理解を深めるためのキャリア教育の一層の充実」の必要性を述べていたが、厚生労働省（2019）によると新規高卒就職者の就職後3年以内の離職率は39.2%と依然として高く、この状況の改善は進路多様校の課題といえる。また、生徒の問題行動にも関わる「人間関係形成・社会形成能力」などは「基礎的・汎用的能力」の1つであり（文部科学省，2011a），キャリア教育は進路多様校でより重視されるべき教育といえる。「キャリア教育を効果的に展開していくためには、教育課程全体を通じて必要な資質・能力の育成を図っていく取組が重要になる。（中略）高等学校においても、小・中学校におけるキャリア教育の成果を受け継ぎながら、特別活動のホームルーム活動を中核とし、総合的な探究の時間や学校行事、公民科に新設される科目「公共」をはじめ各教科・科目等における学習、個別指導としての進路相談等の機会を生かしつつ、学校の教育活動全体を通じて行うことが求められる。（中央教育審議会，2016）」とあるが、2020年度はコロナ禍による対応で、様々な学校行事、生徒会活動や部活動の大会等が縮小・中止となり、それらの活動を通して達成感、自己効力感を得たり、様々な能力を育成したりする機会の多くが失われてしまった。学校の根幹は授業であるが、授業だけで学校教育が成立しているわけではない。特にキャリア教育はその意味合いが強い。しかし、2020年度は多くの学校現場で授業の比重が相対的に高くなっており、そのような状況だからこそ、授業のなかでどのようなキャリア教育ができるかを検討する意味は大きい。

II 方法

1. 対象について

本稿で対象とするのは、公立A高校3年の生物選択者2クラス（A組7名、BC組合同20名）である。A組は入学時の成績と生徒本人の希望調査のもと、進学を目標とする生徒が集められたクラスであり、進学希望者が9割以上在籍している。BC組は進学希望者と就職希望者が約半数ずついるクラスである。この2つのクラスにおける「生物」の授業を対象とした。

2. データ収集の手続きについて

（1）「授業の感想」の記述

8月下旬から11月中旬まで、週4回の授業の最後に3分程度の時間を設けA組36回、BC組28回の授業で「授業感想」を記述させた。A組とBC組とで実施回数に差が出たのは時間が捻出できたか

授業の感想

月 日 ()

3年 組 番

この授業で要点(ポイント) だと思ふことはどこですか。

今日の授業で学んだことについて箇条書きでもいいので書いてください。

図1 授業感想の用紙

によるが、「キャリア教育を盛り込んだ授業」を実践したときは必ず「授業感想」を書かせるようにしていた。A6サイズの用紙にある2つの指示は「この授業で要点(ポイント) だと思ふことはどこですか。」「今日の授業で学んだことについて箇条書きでもいいので書いてください。」である(図1)。以降は記述項目の前者を「要点」、後者を「学んだこと」と記載する。キャリア教育を盛り込んだ授業を実践したのは、データ収集を行うようになって7回目(9月3日)の授業が最初であるが、8月下旬から授業感想等のデータを取ることにした。それは、「意図的にはキャリア教育を盛り込んでいない授業」と「キャリア教育を盛り込んだ授業」での記述内容を比較するためである。また、「意図的には」と表現するのは、授業と関係のない話を生徒がした際にする注意や、提出物の期日を守る・ルールを守ることについての話をすることもキャリア教育の範疇であると考えられるが、そのような

キャリア教育と、教材を用意したキャリア教育とを区別するためである。

授業感想を書かせた目的は、生徒がその授業のなかのどこをポイントだと思ったか、授業者と生徒とでポイントと認めているところとずれがないかを知ることである。また、それらを授業改善のヒントとすることも目的の1つであり、そのような目的について、8月下旬の授業感想を始めたばかりの頃には、配布のたびに説明をしていた。他に、記述することで生徒がその時間の学びを振り返るといふねらいもある。毎回の学習履歴を1枚の用紙にまとめて記述をさせることも検討したが、前時の記述や授業者の記述に引きずられ、「教育効果がある」等の筆者が期待する記述を書いてくることが懸念されたので、授業ごとに配布した用紙に「授業感想」を記述させ回収するという手段をとった。なお、本稿では、授業感想の記述内容は斜体で表記している。

(2) 録音およびフィールドメモにおける授業の様子

キャリア教育に対する生徒の反応がどうであったか、また自発的な発言がどのようなときになされたかを記録するために、生徒に了解を取り、すべての「キャリア教育を盛り込んだ授業」と「意図的にはキャリア教育を盛り込んでいない授業」の8割以上を録音した。また、筆者自身が感じたことでキャリア教育に関わる事柄をノートに記録しフィールドメモとした。これらのデータによりキャリア教育の成果と課題について考察した。なお、(2)は、(1)のデータを補完する形で用いた。

III 結果と考察

1. 意図的にはキャリア教育を盛り込んでいない授業における生徒の反応について

例えば授業感想に書かれた内容は、「要点」として「外胚葉、中胚葉、内胚葉、調節卵、モザイク卵」、「学んだこと」として「発生のしくみは前成説と後成説があり、それぞれの説に調節卵やモザイク卵があることがわかった。」のように、筆者が板書した内容やそれを写したノートの記述を見ながら、生物用語や文章の中の大切だと考える部分をそのまま抜き出して書いた生徒が9割以上で、1~2名の生徒が自身の言葉で書いてくる程度であった。また、記述を見る限り「要点」と「学んだこと」の両方に同じ生物用語を書いた生徒が一定数おり、この両者の違いを生徒は理解していないようであった。前者は「授業のなかで一番ポイント」と生徒自身が思ったところ、後者は本時の

学習で学んだこと、知ったこと等を、箇条書きでも構わないので書いてほしいと話しながら、両者の違いを説明したこともあったが、この2つが混同されていたとしても、授業感想を書かせる目的は達成できると判断し、途中からはほぼ言及しなくなった。一方で、「要点」や「学んだこと」に「単語を覚えること。プリントの問題をしっかりとく。」「図を覚える」「役割を覚える」「腸管と内胚葉を間違えたから気を付けたい」と学習の仕方について記載する生徒も複数名いた。それは授業感想の意図とずれてしまっていることから、授業感想を記入するたびに、「単語を覚える、テスト前に復習をするように学習の仕方ではなく、今日の授業の要点は何だと思うか、例えば調節卵は一卵性双生児と関係がある、のように授業のなかでやったことを書いてください」と説明をしたが、同一の数名が毎回でないにしろ一定の頻度でそのように記述していた。

2. キャリア教育を盛り込んだ授業における成果と課題

2週間に1回程度で、授業のなかにキャリア教育を盛り込んだ。さらに、6回ではあるが、6～15分程度のキャリア教育を盛り込んだ授業も実践した。そのうちの3回は表1の通りである。50分の授業のなかで、キャリア教育を扱った時間を表1の日付の下の()に記した。

表1

実践	日付	キャリア教育のねらいと内容の例(上段)、および授業感想の記述(下段)
1	9/3 (15分)	<p>【ねらい】親が生まれてくる子の遺伝子进行操作することの問題を通して、子どもの権利について考える。【内容】DNAを扱ったときに、ジョディ・ピコー著の「私の中のあなた」の要約プリントを配布し、臓器を提供するバックアップとして生かされる命をどう思うか、親が生まれてくる子どものDNAを編集するデザイナーベイビーをどう思うかを考えさせた。7, 8名に意見を述べさせ、それを板書し、プリントに記載させ、改めて各自どう思うかをノートに記述させた。</p> <p>A組「差別はよくない。選べないものは割り切って我慢するしかない(学んだこと。筆者が説明した内容とは異なる記述であった。)」 「えらべないことをいろいろ言うのはよくない(学んだこと)」</p> <p>BC組「差別はよくない(要点)」 「見ただ目で差別するのはよくない(要点) 生まれつきのものは変えられない。差別をすることはいけない。(学んだこと)」 「黒人差別について理解した(学んだこと)」</p>
2	9/16 (6分)	<p>【ねらい】生まれ持った特性という観点から差別について考える。【内容】視細胞や脳のはたらきの差異により、他の人とは色覚が違う人がいる。様々な理由でいじめ、差別がおこるが、そのなかには、生まれもったもの、自分ではどうしようもないものがあるということを意識するような説明をした上で、いじめ、差別はおかしいという話しをした。アメリカで白人の警察官による有色人種への暴力がニュースで取り上げられている時期であり、大坂なおみ選手が、黒人差別で命を落とした人々の名前の入ったマスクをしていたことも話題にし、差別が許されないことについて板書した。</p> <p>A組「不便を感じる人がいるということ(要点) 差別をしない(学んだこと)」 BC組「さべつ(要点)」 「色覚に問題がある人がいるということ(学んだこと)」 「色覚が全員にあるわけではない(要点) 色が分からない人がいるからって差別しない(学んだこと)」</p>

3	11/ 2 (9分)	【ねらい】 体罰やDVが成長に与える悪影響を知り，それらを忌避する心を養う。 【内容】 動物の行動の学習の分野で，罰や暴力は学習に効果がないばかりか悪影響があるという話しをした。さらに，体罰やDVが許されない理由を7，8名の生徒にあげさせ，それがヒトだけでなく多くの動物に当てはまるという話しをした。
		A組「体罰は生物学的にもよくない（学んだこと）」

また，記述を重ねても記述量や内容に向上が見られず，キャリア教育に関する記述も見られなかったという実態の例として生徒Aの1～13回の授業での記述を表2に示す。表2の9/ 3と9/16はキャリア教育を行った授業（表1の実践1と実践2）の記述である。

表2

日付	学習概要	要点の記述	学んだことの記述
8/25	器官の形成	絵	ワークをとにかく解く
8/26	発生の仕組み	わからない	わからない
8/27	シュペーマンの実験1	神経・表皮の入れ替え	神経胚初期のときに入れ替え
8/31	シュペーマンの実験2	(記述なし)	(記述なし)
9/ 1	眼の形成	眼の部分	眼
9/ 2	中胚葉誘導，タンパク質合成	DNAとしくみ	(記述なし)
9/ 3	セントラルドグマ，DNA	DNAからタンパク質こうし（書きかけであると推測できる）	UCAG（4つの塩基を書いていると推測できる）
9/ 7	ショウジョウバエの発生	DNA，遺伝子	ハエと人間の遺伝子が似てる
9/ 9	被子植物の配偶子形成	〇〇細胞 ↑あとは種類と位置を覚える	のしくみ 細胞の分かれ方（分裂）
9/ 9	重複受精	細胞	〇〇細胞
9/10	無胚乳種子，葉の構造	葉の断面	中学校で習った時より種類が増加。復習+
9/15	眼の構造	目	(記述なし)
9/16	明暗調節，色覚による差別	目のしくみ	色覚に問題がある人がいるということ

表1の実践1では，28名中5名が授業感想にキャリア教育についての記述をした。しかし，このときに筆者がキャリア教育に関して一番伝えたかったことは，「親が勝手に子どもの遺伝子进行操作することに懸念を持っている。子どもには子どもの人生があり，親が自分の思いで遺伝子まで変えてしまうのはいかがなものか。」ということであるが，それに関する記述はなく，そのあとに付け加えた差別の話の記述のみであった。また，「デザイナーベイビー」という用語は初めて聞く用語であり「学んだこと」と言えるはずだが，そのことの記述もなかった。その後，別の授業でも，キャリア教育を盛り込んだ授業を実践したが，キャリア教育についての記述は全く無いか，あってもキャリア

教育としてのねらいとは異なっていた。この理由として、この授業を選択している生徒にとっての学習とは教科書に書いてあること・試験に出ることであり、それ以外の授業者が話したこと等は学習に含まれていなかったのかもしれない、ということが考えられる。この学びに対する教師と生徒の認識のずれを修正するために、「教科書や演習問題で扱った内容以外でも、自分はこういう価値観を知った・学んだということも、学んだことなので、そう思ったときは書いてください」と3回ほど話しをしたが、それでも記述に変化はなく、「意図的にはキャリア教育を盛り込んでいない授業」における記述と同様に、教科内容に関係するノートや板書からの記述ばかりであった。

実践2では、キャリア教育の内容についても板書をすれば、それについての記述が増えるのではないかと推測し、キャリア教育として生徒に深く考えてほしい内容について板書をした。このときに板書した内容は「今の世界は色覚がある人たちが作った世界。不便を感じる人がいることを忘れないこと。遺伝的に病気になりやすい人がいるのと同じ。肌の色と同じ。生まれもったもの、本人の努力ではどうにもならないもので差別されるのはおかしい。不便さが少しでもなくなる世の中に。」であったが、生徒の授業感想の記述は実践1と比較すると、記述数、内容ともにさほど違いは見られなかった。

実践3では、体罰やDVは許されないという話しをしたが、直接的、間接的にその様な経験をしている生徒がいることを教師という立場上、知っているケースもあったので丁寧に授業を進めた。具体的には、許されない理由を1つ1つ生徒にあげさせ、それらを板書し、筆者の解説も書き加えたのちノートに写させた。体罰や暴力を忌避する大人になってほしいとの筆者の思いも伝えた。生徒のなかには、授業者の話に目を見て頷きながら話を聞いていた者もいたが、授業感想でそのことに触れたのは1名だけであった。

以上の3つの実践の結果から分かるように、キャリア教育に関する記述はほとんど見られなかった。これはどうしてだろうか。いくつかの可能性を列挙する。1つ目に「この生物の授業では教科書・問題集にあるような教科の内容以外は学んだこととして受け止められていなかった」ことがあげられる。筆者は、定期試験に出題する問題について、「授業中に実施した演習問題か、副読本（生徒全員が購入している問題集）から、ほぼそのまま出題する」と年度当初に説明をしている。このような取り組みにしたのは、問題プリントと板書で図が違っていると理解できないという生徒に何人か会ったことがきっかけである。「見たことがない問題を出すのはずるい。先生は私を赤点（進級・卒業に影響が出る境界点以下の点数）にしようとしている」と不満を言いながら学習意欲を失っていく生徒もいた。問題プリントや板書の図は模式図であるので、問題ごとに差異があり、教科書や実物と違いがあるのは当たり前と認識していたが、生徒にとっては、その差異がある図から、類似点を見出して問題を解くことに抵抗感を覚える者もいる。また、授業とほぼ同一の問題が定期試験に出題されることで、やればやっただけ報われるという自己肯定感をつかめる生徒もいることから、この取り組みをしていたが、筆者の「生物」の授業特有のこの取り組みが、逆に授業で扱った内容だけが学びという認識に拍車をかけてしまった可能性はある。

2つ目の理由として「授業感想を書く目的の説明および、用紙の問題」があげられる。「キャリア教育を盛り込む授業」をする以前から授業の最後に授業感想をしており、記述することを常態化させていた。生徒にしてみると用紙が返却されないことから、記述内容へのフィードバックはなく、成績や評価にも関係ないことから、多くの生徒にとって授業感想を書くことがルーティンワークのような関心のないものとなっていたことが考えられる。記述する時もその授業の学びについて積極的に思い出したりしている様子は見られず、授業感想を書く意味が分からないまま、ノートを見ながら、重要語句を拾い出す作業となっていた生徒もいたはずである。実践1で「デザイナーベイビー」や「親が生まれてくる子の遺伝子を勝手に操作することはよくない」という記述ではなく、

「差別はよくない」と書いたのも、キャリア教育の学びをまとめて書くには文章が長くなることや、自身がよくわかっていないことを頭のなかで整理し直して書くよりも、知っている単語で短く文をまとめてしまった方が楽だと判断したのではないかと推測できる。もし、学校行事などで「命の大切さ」についての講演を聞き、感想文を書く場面であったなら、ある程度の内容の文章を書く生徒も、意味が見えない3分程度の授業感想にそこまで労力はかけられないと判断していてもおかしくはない。

では、「要点」や「学んだこと」の記述に「単語を覚えること。プリントの問題をしっかりとく」「図を覚える」「役割を覚える」のように学習の仕方を記入し、何回か話をしてもなかなか修正されなかった生徒はどうであろうか。これらを記述した生徒は「要点」と「学んだこと」の一方に「図を覚える」等の記述をし、他方には生物用語やノートにある文章の一部を記述していた。このような記述をした生徒たちは、「要点」と「学んだこと」をどのように区別すればいいか分からなかったものの、違うことを書く必要があると認識していた可能性がある。用紙の質問項目が分かりにくかったことで、何を書けばいいのかはつきりせず、それでも何か書いておこう、という認識となっていたのかもしれない。もし、筆者が「要点」と「学んだこと」の違いについて言い続けていたなら、両方に同じ生物用語を書いたり、一方に学習方法を書いたりせずに、「要点」と「学んだこと」を区別した記述となっていた可能性はある。

3つ目として「課題設定の問題」があげられる。授業内のキャリア教育は、教科の学習内容に関連づける必要があるために、扱う内容が限定される。その限定されたなかで用意した教材が生徒の興味・関心をひきつけるに十分ではなかった可能性がある。差別や暴力は許されないといった社会性の話題の多くは、生徒からしてみると普段から言われている内容であり、真新しさを欠く分、興味・関心をひきつけやすい内容ではない。そこを工夫し、生徒にとって魅力的な課題とするべきなのだが、今回、筆者が提示した教材は、そこまで達しておらず準備不足であった可能性は十分にある。

4つ目として、「キャリア教育に対する意欲・能力を高めるような指導が十分でなかった」ことがあげられる。生徒から見ると教科学習のなかに、それまでと違う学習が入ってきたことで、雑談が始まったと捉えていたかもしれない。生徒は息抜きの時間と捉え、学んだこととは受け止められなかった可能性もある。雑談とは捉えられないように配慮したキャリア教育への展開の仕方、教科学習とキャリア教育が混在した問題プリントの作成等、キャリア教育と教科学習との連続性を意識した授業をつくるなどして、キャリア教育に対する意欲・能力を高めていくことが求められる。表2に示した生徒Aは、他の生徒に比べ、ノートを書き始めるタイミングやノートをとるペースが比較的遅いため、板書の量が多いときは、「筆者が説明している内容」と「ノートをとりながら学習している内容」とが、ずれてしまうことがある。筆者は授業のなかで、説明を聞く時間、ノートをとる時間等、今生徒が何をやる時間なのかを提示しながら授業を進めるようにしているが、意欲を高められない授業が、学びに対するレディネスが十分でない状況をつくり出し、生徒Aのノートをとる等の活動開始を遅らせ、それがさらに次の学びに対するレディネスが十分でない状況をつくり出すという悪循環を生じ、こういったことが学習感想の記述にも影響していたのかもしれない。

IV 総合考察

授業には、教科ごと、単元ごと、その時間ごとのねらいがあり、生徒の意欲や能力を高めるための教材として、板書計画、演習問題、映像資料、雑談等がある。教科のねらいと様々な教材には、目的と手段という関係性があるが、一方で教科学習と教科のなかのキャリア教育には、相互が相

手の目的のための手段となりうる相補的な関係があると考え。筆者が考える「教科学習のなかのキャリア教育」は月に1回程度の頻度で、時間も10分弱と短いものを想定しているが、それでも、そのキャリア教育は、教科学習と互いに対相補性があるような内容や構成で授業をつくっていくこ

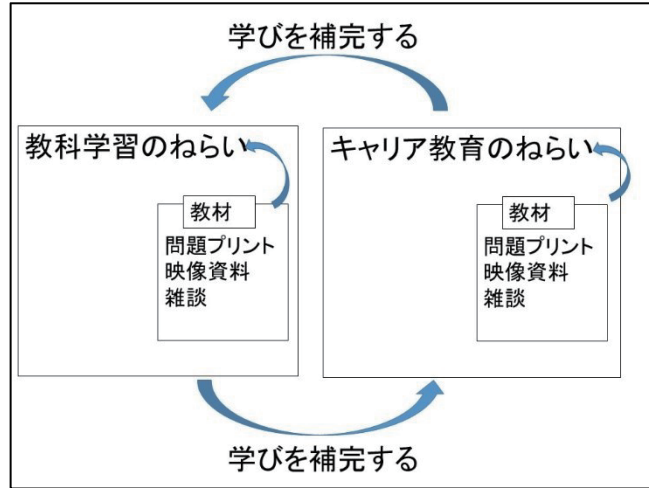


図2 キャリア教育と教科の関係

とが理想的であると考えている（図2）。

相互の学習をより効果的なものにするためにも、その時間の学びと関連づけられたキャリア教育の教材研究が重要となる。授業計画を作成するにあたり、教科学習ではねらいに合わせて教材が選定されるが、一方で教科のなかのキャリア教育は、教科の学習が先にあり、それに合わせて「ねらい」を選定するという「ねらい」が後づけされるという特徴がある。また、各教科の授業のなかで行われることから時間を多く割くことはできない。このようなことを踏まえ、相補性が発揮されるように授業を展開するためには、単元ごと吟味された教材を用意し、積極的に実践を重ね、それらを多くの教師と共有することが必要である。様々な機会にこの取り組みを話題にし、同様の取り組みをしてくれる仲間を増やし、よりよいキャリア教育の教材づくりをすることが求められる。さらに学びの相補性が具体的にどのような作用によって成り立つのかの検討も今後の課題である。

本稿は進路多様校での実践をもとにしているが、進学校ではどうだろうか。進学校の生徒のなかには学習は入学試験のための手段と考えている者もいる。その生徒のニーズに引っ張られる形で、教師も進路実現の名のもとに、効率的に点数を上げることに重点を置く授業をする者もいる。それは生徒のニーズに沿っているといえるが、しかし、進路実現とは志望校に合格するという出口指導だけを意味しているのではない。国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2010）にも述べられているように、進学先で中途退学者とならないためにも、進学校では進学校としてのキャリア教育が必要であり、それは学校教育全体で行われるべきである。言わずもがな、授業のなかにキャリア教育があることで生徒に好影響があるのであれば、それは導入されるべきであり、そうなるかは授業者次第といえる。今後は進路多様校だけでなく、進学校での運用も見据えた教材研究に励んでいきたい。

本稿は、高校の授業におけるキャリア教育を模索するなかでたどり着いた1つの実践例であるが、

キャリア教育の在り方を問い直す機会を提供できたと考える。

V 引用文献

中央教育審議会. (2016). 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)

国立教育政策研究所生徒指導研究センター. (2010). キャリア教育は生徒に何ができるのだろうか?.

厚生労働省. (2019). 新規学卒就職者の離職状況 (平成28年3月卒業者の状況) を公表します.

https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000177553_00002.html, 2020.11.19

文部科学省. (2011a). キャリア教育. 高等学校キャリア教育の手引き 第1節キャリア教育の必要性と意義 (その1). 8-25

文部科学省. (2011b). キャリア教育. 高等学校キャリア教育の手引き 第1節キャリア教育の必要性と意義 (その2). 31-35